



① アルミ鋳物
② 作業の様子
③ 加工治具
④ 横型マシニングセンター

あい いー ていー
株式会社 IET



代表取締役社長
かたひら としや
片平 俊也 さん



他社にはまねのできない
アルミ鋳造

当社は小さな会社ではありますが、私の長年培ったアジア諸国との人材交流により、ベトナムのアルミ鋳物メーカーと提携しています。高度な情報化社会において、アジア諸国との距離はないと考えており、アルミ鋳物業界のビジョナリーカンパニーとなるためにも、我が国が目指すアジア諸国と一体となったものづくりを進め、日本とアジア諸国の製造業がともに成長できる社内体制を目指していきたいと考えています。

■主な事業内容
アルミ鋳物の鋳造および機械加工
■主な取引先(納入先)
草刈り機メーカーなど

住 所 / 〒570-0003
大阪府守口市大日町4-2-15
TEL / 06-6901-7058
FAX / 06-6901-7058
創 業 / 平成21年1月
設 立 / 平成21年1月
資本金 / 500万円
従業員 / 4名

<http://iet.jp/>

蓄積された設計技術を駆使し、 顧客に最適な提案を

事業内容と沿革

設計と最終加工を自社内で

「IET」は長年ダイカストの設計技術者として経験を積み、特級ダイカスト技能士の資格を持つ片平俊也社長が平成21年に立ち上げた会社。現在は草刈り機などのミッションケースなどを製作している。通常、製品の設計・開発は顧客側でのみ行うが、同社の場合、設計段階からかわっていき最適な設計を提案する。「ここでの提案が最終加工をする際の加工処理のしやすさにつながってくる」と片平社長はポイントを指摘する。また加工治具などは完全に内製化し、リードタイム短縮に貢献している。内製

化を進めるメリットは単にリードタイム短縮だけではなく、自社にとって技術的なメリットもあり、必要な治具を正確に設計することは技術力向上につながるという。

最近ではダイカストメーカーより技術的な支援を要求されることもしばしばあり、他社にはない同社の技術力は業界内で評判となっている。技術的な問題点を素早く見抜き、砂型鋳物からダイカストへの変更を提案したり、機械加工が必要となる部品についても加工レスに成功するなど、顧客からの信頼も厚い。

強み

優秀な人材を確保

同社には2名のフィリピン人技術者がいる。両名はフィリピン国内の一流国立大学の工学部を卒業しており英語も堪能。国際色豊かで優秀な技術者を確保することで、グローバル展開を含めた多様なニーズに対応することができるのが強みだ。「まじめで勤務態度も良く、必要なことは聞いてくるし、外国人労働者であってもまったく問題はない」と2名の従業員に信頼を寄せる。

提携しているベトナムのアルミ鋳物メーカーから毎月コンテナによる輸入を行っており、小ロットの海外生産にも対応している。海外からの鋳物輸入になるが、最終加工は日本国内で行っており精度確保に問題はない。また片平社長自ら月の半分はベトナムに赴き、現地のワーカーに積極的に技術指導を行っている。

現在は量産物が多いが、将来的には試作なども行っていきオンリーワン企業を目指す。「『IET』であればできるのではないか?と言われるような存在になり、受注を増やしたい」と将来を見据える。

取り組み

視点を変えた発想で 課題解決

アルミ加工において、寸法の狂いほどの企業でも長年の課題。通常は加工現場の室温などをこまめにコントロールし、熱によるひずみを最小限に食い止めようとし、また最終的には加工機械による補正をかけるのが一般的だ。

しかし片平社長は「室温や外気温に注目するのではなく、アルミの熱伝導率の良さを利用して、加工対象物自体の温度をコントロールすればいいのではないか?」と発想を転換させた。適切な温度を出せるクーラント液射出機をオーダーメイドで製作した。クーラント液の温度をコントロールすることにより液の温度で加工対象物自体の温度も同時にコントロールし、熱によるひずみを抑えることに成功した。適切な温度での加工が可能となり、加工終了後すぐに寸法を計測しても問題のないレベルまで精度を上げることができた。

現在は海外の2社を含めた協働会社6社とは今後もさらに連携を深めていき、研究結果をものづくりに反映していく考えだ。

今後の展開

ロボット関連業界を注視

ロボットを中心とする精密部品はアルミブロック材からの削り出しが多い。これはアルミ鋳造ではなかなかメーカーから求められる高い精度が出せないためだという。また、アルミ鋳物の機械加工は加工治具の製作も難しく、加工しやすい形状への設計変更も難しい。

しかしそのような業界に対しても今後は積極的に営業活動を行う予定。削り出しで製作する部品について、鋳物に置き換えて製作したほうが最終的にメリットが出る場合もあることを積極的にアピールしていく考えだ。「会社としての技術力も年々向上しているし、優秀な人材も育ってきた。実際に国内自社工場に最新鋭の加工機を導入し、きっちり精度が出せるようになっている」と自信をみせる。

現在、国のロボット産業への期待は高く、成長産業の筆頭としてあげられており、市場規模は平成47年(2035年)には9.7兆円とも予測されている。「最近ではロボット関連の仕事も受注できるようになってきた。ロボット業界の伸びしろはまだ大きい」と片平社長は成長分野に活路を見いだす。